

犬の認知機能不全 症候群治療への試み



～我々は、認知症にどうアプローチするべきか～

樋渡 敬介 (御殿場インター動物病院)

第1回 四肢麻痺に対する「テルミサルタン」の使用例

はじめに

最近、診察時に「加齢に伴う症状です」というフレーズを飼い主に対して使用する機会が増えていないでしょうか。統計的にも日本のペットの平均寿命は延伸しています¹⁾。そんな中、特に超高齢犬の認知機能不全症候群(Cognitive Dysfunction Syndrome:CDS)に対しては、決定的な治療方法

は未だ皆無であることから、我々獣医師を悩ます疾患の一つです。

そこで今回から数回に渡り、我々(Japan Veterinary Microcirculation Research Center:JVMRC)²⁾が2014年よりCDSへの治療として試みている事例を紹介します。

四肢麻痺に対する治療

いわゆる「足のふらつき(四肢麻痺)」です。これらの多くは、体の筋肉や神経反射の衰えとともに進行性に発症することが知られています³⁾。様々な治療の選択が存在すると思いますが、高齢動物の治療で「5つの原則」としている注意事項があります(表1)。

そこで、我々はアンジオテンシンⅡタイプ1受容体阻害薬(ARB)であるテルミサルタンが四肢微小循環を改善し、四肢麻痺の治療に有効であるという新しい治療戦略を立てました。テルミサルタンは動物薬では、「セミントラ®」(バーリンガーインゲルハイム)という商品名で2014年猫の腎不全用薬として発売され⁴⁾、2022年9月からは、全身性高血圧症治療用の効能も加わった動物薬です。

テルミサルタンは人で優れた降圧効果の持続を特長とすることから主に降圧剤として知られており、近年では局所的な微小循環への効果が着目されている薬です。具体的には、骨格筋への作用によって筋力の維持や増強に作用することや^{4~9)}、人の高血圧で、降圧剤を使用している方と、使用していない方を比較すると、使用している方はアルツハイマー型認知症の発症リスクが優位に低下し、さらに個々の降圧剤の比較を行ったところ、ARBが他の降圧剤と比較して最もリスクが低いことが示された報告もあります¹⁰⁾(イヌの認知症は血管性認知症に近いと報告されています¹¹⁾)。

- | |
|---------------------------|
| 1) 薬の数を最小限にする |
| 2) 薬の用量を少なめから始める |
| 3) 加齢による体構成成分を考慮する |
| 4) 加齢による生理機能(腎、肝)の変化を考慮する |
| 5) 併用薬の使用に注意する(薬物相互作用) |

表1. 高齢動物の治療での注意事項「5つの原則」

上記の原則を考慮した上で、以下のような治療を模索しました。

- ①身体への負担が少ない
- ②飼い主の投与・管理が容易である
- ③CDS全体への包括的効果も期待できる